

Title	岐阜県大垣方言におけるヴォイス：形態と構文
Sub Title	
Author	吉安, 良太(Yoshiyasu, Ryōta)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2024
Jtitle	三田國文 No.69 (2024. 12) ,p.71 (16)- 86 (1)
JaLC DOI	10.14991/002.20241200-0071
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20241200-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岐阜県大垣方言におけるヴォイス

——形態と構文——

吉 安 良 太

1. はじめに

本稿は、岐阜県大垣市中心部で現在話されている方言（以下、大垣方言）において、ヴォイスがどのような形態で表現され、どのような構文を取るのかについて記述を行うものである。

形態に関しては、その活用とアクセントについて述べる。大垣方言における動詞の活用およびアクセント決定の基本的な仕組みについては既に吉安（2021）pp. 146-142 に記述した通りであるが、本稿ではヴォイスを表す各接辞について具体的に活用例を示していくこととする。大垣方言のアクセントは、内輪東京式に分類され、アクセント核（下がり目）の有無とその位置のみが有意な体系である。よって、本稿においてアクセントを含めた音形を示す場合には、該当箇所をカタカナで表記して / / 内に収め、アクセント核を「¹」で示す。アクセント核を持たない語については、その末尾に「¹」を付することで平板型である旨を明示するものとする。また、構文に関しては、能動態を基準として格関係にどのような変化が生ずるのかを述べる。

大垣方言におけるヴォイスの形態的側面については、既に杉崎・植川（2003）によって大正期、奥村編（1976）pp. 215-219 によって昭和期の様相が、学校文法に準拠して「助動詞」ごとに簡潔に記述されている。一方、構文的側面については、標準語との目立った差異がないためか、岐阜県方言を扱った山田（2005）pp. 74-75 の調査など、僅かな先行研究しかない。本稿は、通時的には前掲の先行研究に続いて現代の大垣方言におけるヴォイスの様相を詳らかにするものであると同時に、共時的には当地周辺の方言におけるヴォイスの構文的側面に関して素描的な記述を提供するものである。なお、本稿の記述は、特記なき限り、筆者自身の個人語に基づくものである。筆者（20代男性）は、大学進学までの18年間を岐阜県大垣市の旧城下町域で過ごした、大垣方言の生え抜き話者である。

2. 本稿におけるヴォイス

本稿では、動詞の活用に伴って格関係の変化が生ずるものを、広くヴォイスとして扱

う。ここでの活用とは、屋名池（2005a）pp. 71-77 に基づき、接辞や語尾の付加による語形変化を指す。例えば、無標のヴォイスである能動態⁽¹⁾に対して〈-(r)are-〉〈-(s)ase-〉のような接辞を付加することで表現され、それに伴って格関係の変化が生ずる受動態や使役態は、標準語と同じく大垣方言においても典型的なヴォイスである。なお、格関係の変化には項数の増減も含まれ、下例では使役態において使役者を表す項（波線部）が増加している。

- a. 能動態： 太郎**ガ** 花子**ヲ** 褒める (home-(r)u)⁽²⁾
 b. 受動態： 太郎**ニ** 花子**ガ** 褒め**られ**る (home-(r)**are**-(r)u)
 c. 使役態：次郎**ガ** 太郎**ニ** 花子**ヲ** 褒め**させ**る (home-(s)**ase**-(r)u)

一方で、例えば「動詞テ形+〈ある〉」という表現は、下例 d → e のような格関係の変化を生ずるものの、本稿におけるヴォイスには含まれない（以下、破線は項の減少を示す）。これは、当表現が、動詞（下例では〈停める〉）自身が活用するだけではなく、その後ろに別の語である補助動詞〈ある〉を伴うことで初めて成立するものであるためである。このように、2語以上からなる表現は、格関係の変化を生ずる点でヴォイス的性質を有しているとしても、動詞の文法範疇としてのヴォイスとしては認められない。

しかしながら、上述のような「動詞テ形+補助動詞」の形式に由来するものであっても、既にその縮約形が接辞化している場合は、この限りでない。例えば、大垣方言には、上述の「動詞テ形+〈ある〉」の縮約に由来する、同じ意味の接辞〈-tar-〉が存在する⁽⁴⁾。この接辞を用いた下例 f のような表現は、2語ではなく1語の動詞の活用として分析できるため、ヴォイス（本稿では存続態と呼称）として認められる。

- d. 能動態：太郎**ガ** 車**ヲ** 停める (tome-(r)u)
 e. 「動詞テ形+〈ある〉」： 車**ガ** 停め**て** # ある (tome-**te** # **ar**-(r)u)⁽⁵⁾
 f. 存続態： 車**ガ** 停め**たる** (tome-**tar**-(r)u)

なお、たとえ1語の動詞であっても、その活用に伴って格関係の変化が生じているのであれば、ヴォイスとしては認められない。例えば、動詞〈合う〉（語幹〈aw-〉）を後項とする複合動詞は、前項動詞（下例では〈書く〉）の格関係を基準とすると、下例 g → h または g → h' のような格関係の変化を生じているように見える。

- g. 太郎**ガ** 花子**ニ** 手紙**ヲ** 書**く** (kak-(r)u)
 h. 太郎**ガ** 花子**ト** 手紙**ヲ** 書き**あう** (kak-i-**aw**-(r)u)⁽⁶⁾
 h'. 太郎**と** 花子**ガ** 手紙**ヲ** 書き**あう** (同上)⁽⁷⁾

だが、上例 h および h' における〈書きあう〉は、前項動詞の中止形〈書き (kak-i)〉と後項動詞〈合う (aw-(r)u)〉の2語が複合語を形成することで1語の動詞となったものであって、語幹〈kak-〉に接辞〈*(i)aw-〉と語尾〈-(r)u〉とを付加してできた、前項動詞〈書く〉の活用形〈*kak-(i)aw-(r)u〉⁽⁸⁾ではない。つまり、上掲の格関係の変化は、動詞の活用ではなく複合語の形成に伴って生じたもの、更に言い換えれば、〈書く〉と〈書きあう〉とが別々の語であることによる格支配の差異に過ぎないのである。したがって、両者を一つの動詞におけるヴォイスの違いとして解釈するのは適切ではないため、本稿では、複合動詞の形態をとるものはヴォイスとして扱わないこととする。

また、本稿がヴォイスとして扱う形態の中には、動詞語幹に形容詞化接辞が付加され、活用上は形容詞として振る舞うものも含まれる。例えば、動詞語幹に希望を表す形容詞化接辞〈-(i)ta-〉を付加した形態は、下例 i → j のような格関係の変化を生ずるものであり、本稿では希求態というヴォイスとして扱う。このような形態は、活用こそ形容詞型であるが、下例 j' のようにヲ格をとりうる点や、形容詞化接辞の付加に伴う音挿入（ここでは /i/ の挿入）⁽⁹⁾が動詞の活用と同じ機構で説明できる点から、本稿では別語の形容詞ではなく、動詞の活用形の一つとして認めるものとする。

- i. 能動態：太郎ガ 水ヲ 飲む (nom-(r)u)
 j. 希求態：太郎ガ 水ガ 飲みたいのは 知⁽¹⁰⁾つとる (nom-(i)ta-i)⁽¹¹⁾
 j'. 太郎ガ 水ヲ 飲みたいのは 知⁽⁹⁾つとる (同上)

以下では、上述のような基準によって大垣方言に認められる各ヴォイスについて、その形態と構文とを順に記述していくこととする（無標のヴォイスである能動態を除く）。

3. 可能態

可能態については、先述の通り、吉安（2023）において詳述した。したがって、以下ではその概要を簡潔に示すに留める。

大垣方言には複数の可能表現が存在するが、動詞の形態と格関係の変化を伴う、ヴォイスとして認められる可能表現は、接辞〈-(r)e-〉〈-(e)re-〉〈-(r)are-〉を用いるもののみである。ただし、〈-(e)re-〉は使用頻度が低く、〈-(r)are-〉は高年層で母音語幹動詞（カ行変格動詞を含む）にのみ使われるもので、特に語幹が3拍以上かつ打消形（語尾〈-(a)n)〉の場合に比較的現れやすい。また、いずれの接辞もサ行変格動詞には付くことができず、〈する〉の可能態としては常に補充形〈できる〉/デキ⁷ル/が用いられる。

これらの接辞はいずれも、+アクセント素性を有するか、アクセント素性自体を有さないかで揺れている。アクセント素性とは、動詞語幹や一部の接辞が有する、動詞全体

のアクセント決定に関わる因子である。アクセント素性には+と-の2種類があり（屋名池（2005b）p. 78）、本稿ではこれを⊕／⊖として適宜、語幹や接辞の前に示している。動詞全体のアクセントは、語尾の直前にある語幹もしくは接辞（その接辞がアクセント素性を持っていない場合は、更にその直前の語幹もしくは接辞）のアクセント素性と、語尾ごとに指定されている潜在的なアクセント核の位置との組合せによって決定される。例えば、動詞の終止形の場合には、語尾〈-(r)u〉の直前にある語幹または接辞が+アクセント素性を持っていれば次末拍にアクセント核がある中高型（例：⊕deki- + -(r)u → dekiru /デキ[↑]ル/（出来る））に、-アクセント素性を持っていれば平板型（例：⊖job- + -(r)u → jobu /ヨブ[―]/（呼ぶ））になる。したがって、下例において〈呼べる〉〈寝（ら）れる〉のアクセントが2通り挙げられているのは、前者の場合（/ヨベ[↑]ル/, /ネ（ラ）レ[↑]ル/）と後者の場合（/ヨベ[―]ル/, /ネ（ラ）レ[―]ル/）をそれぞれ反映したものである。

〈(⊕)-(r)e-〉⁽¹²⁾

子音語幹	⊕kak- + -(r)e- + -(r)u → kakeru /カケ [↑] ル/	《書》 ⁽¹³⁾
	⊖job- + -(r)e- + -(r)u → joberu /ヨベ [↑] ル/~/ヨベ [―] ル/	《呼》
母音語幹	⊕mi- + -(r)e- + -(r)u → mireru /ミレ [↑] ル/	《見》
	⊖ne- + -(r)e- + -(r)u → nereru /ネレ [↑] ル/~/ネレ [―] ル/	《寝》
不規則	⊕ko- + -(r)e- + -(r)u → koreru /コレ [↑] ル/	《来》

〈(⊕)-(e)re-〉

子音語幹	⊕kak- + -(e)re- + -(r)u → kakereru /カケレ [↑] ル/	《書》
	⊖job- + -(e)re- + -(r)u → jobereru /ヨベレ [↑] ル/~/ヨベレ [―] ル/	《呼》
母音語幹	⊕mi- + -(e)re- + -(r)u → mireru /ミレ [↑] ル/	《見》
	⊖ne- + -(e)re- + -(r)u → nereru /ネレ [↑] ル/~/ネレ [―] ル/	《寝》
不規則	⊕ko- + -(e)re- + -(r)u → koreru /コレ [↑] ル/	《来》

〈(⊕)-(r)are-〉

母音語幹	⊕mi- + -(r)are- + -(r)u → mirareru /ミラレ [↑] ル/	《見》
	⊖ne- + -(r)are- + -(r)u → nerareru /ネラレ [↑] ル/~/ネラレ [―] ル/	《寝》
不規則	⊕ko- + -(r)are- + -(r)u → korareru /コラレ [↑] ル/	《来》

格関係の変化については、標準語と同様、能動態における {ガ格／ヲ格} が a. {ガ格／ガ格} あるいは b. {ガ格／ヲ格} で標示される。否定文・疑問文（間接疑問の場合も含む）に限っては c. {二格／ガ格} で標示することも可能であるが、筆者の内省によれ

ば、その頻度は a, b に比べて低い。

- a. 太郎**ガ** 英語**ガ** しゃべれんことは知っとる
- b. 太郎**ガ** 英語**ヲ** しゃべれんことは知っとる
- c1. 太郎**ニ** 英語**ガ** しゃべれんことは知っとる
- c2. 太郎**ニ** 英語**ガ** しゃべれるかは分かん
- cf. 太郎**ガ** 英語**ヲ** しゃべる (能動態)

4. 自発態

自発態は、動詞に接辞〈(⊕)-(r)are-〉を付加することによって表される。可能態の〈(r)are-〉と同形であるが、自発態の〈(r)are-〉は子音語幹動詞(例：⊕omow- + -(r)are- + -(r)u → omowareru /オモワレ¹ル/〈思われる〉)やサ行変格動詞(⊖s- + -(r)are- + -(r)u → sareru /サレ¹ル/〜/サレル¹/〈される〉)にも付くことができるという点で異なる。その一方で、自発態を取りうるのは、標準語と同様、「思考・感覚・感情を表す動詞に限られている」(日本語記述文法研究会編(2009) p. 285)。また、可能態では接辞〈(r)e-〉〈(e)re-〉〈(r)are-〉が原則として自由に交替可能であるのに対して、自発態では〈(r)are-〉しか用いられない。以下、典型的な例を挙げる。

- a. その話を聞いたら、ふっと昔のことが
{*思い出せた/*思い出せれた/思い出された}
- b. まさか太郎が今度結婚するとは {*信じれん/信じられん}
- c. この音楽を聞くと、綺麗な風景が {*連想できる/連想される}

なお、可能態と同じ形態が〈その話は泣ける〉のように自発を表すことがあるが、これは、可能態を作る他の接辞と交替できない(例：{*その話は泣けれる)。ことから可能態ではなく、また、自発態とも形態的に異なる(仮に自発態接辞〈(r)e-〉を認めると、上例の非文が説明できなくなってしまう)。このような例は、〈泣ける〉〈笑える〉以外にほとんど例がなく(日本語記述文法研究会編(2009) p. 285)、かつ渋谷(1993) p. 23の「評価の属性段階にある潜在的可能」の一種であると考えられることから、本稿では語彙的自動詞として見ることにする。また、他動詞〈見る〉に対する自動詞〈見える〉のような例も、意味上自発を表しているが、動詞の規則的な形態変化によるものではないため、ヴォイスとしての自発態とは言えず、語彙的自動詞と見る。

格関係の変化については、標準語と同様、能動態における {ガ格/ヲ格} が {二格/ガ格} で標示される。

- d. 私二は 太郎の言葉ガ 信じられん
 cf. 私ガ 太郎の言葉ヲ 信じん (能動態)

5. 受動態

受動態は、動詞に接辞 <⊕-(r)are-> を付加することで表される。形態的には自発態と完全に同一である。

子音語幹	⊕kak-	+ -(r)are-	+ -(r)u	→ kakareru	/カカレ ¹ ル/	《書》
	⊕job-	+ -(r)are-	+ -(r)u	→ jobareru	/ヨバレ ¹ ル/~ヨバレル ¹ /	《呼》
母音語幹	⊕mi-	+ -(r)are-	+ -(r)u	→ mirareru	/ミラレ ¹ ル/	《見》
	⊕ne-	+ -(r)are-	+ -(r)u	→ nerareru	/ネラレ ¹ ル/~ネラレル ¹ /	《寝》
不規則	⊕ko-	+ -(r)are-	+ -(r)u	→ korareru	/コラレ ¹ ル/	《来》
	⊕s-	+ -(r)are-	+ -(r)u	→ sareru	/サレ ¹ ル/~サレル ¹ /	《為》

格関係の変化については、基本的に標準語と同様である。直接受身では、能動態における {ガ格 (旧主語) / ヲ格} が {二格 ~ カラ格 ~ ニヨッテ格 / ガ格 (新主語)} で標示される。このうち、動作主を表す格については、方言差のあることが従来知られている (国立国語研究所編 (1989) 第27図参照) が、大垣方言では標準語と同じく二格が普通であり (下例 a)、カラ格は「具体的あるいは抽象的な移動や方向性が含意されているとき」 (日本語記述文法研究会編 (2009) p. 224) に用いられる (下例 b)。ニヨッテ格については、書き言葉的な堅い表現としては「動作の主体や原因的な意味をもつ能動主体」 (同 p. 223) に対して用いられることがあるが、当方言における通常の話し言葉ではそのような場合、〈法隆寺は聖徳太子によって建てられた〉の代わりに〈法隆寺は聖徳太子が建てた〉と言うなど、受動態の使用そのものを避けて能動態を用いる方が普通である。

- a. 太郎二 花子ガ 褒められた
 cf. 太郎ガ 花子ヲ 褒めた (能動態)
 b. 太郎カラ 花子二 花束ガ 渡された
 cf. 太郎ガ 花子二 花束ヲ 渡した (能動態)

間接受身 (持主受身・迷惑受身を含む) では、事態の影響を受けるもの (持主受身ではその持ち主) を表す項が1つ増え、それが新主語としてガ格で標示される。同時に、能動態における {ガ格 (旧主語) / ヲ格} は {二格 / ヲ格} で標示される。

- c. 太郎ガ 雨ニ 降られる
 cf. 雨ガ 降る（能動態）
 d. 太郎ガ 花子ニ 肩ヲ 叩かれた
 cf. 花子ガ（太郎の）肩ヲ 叩いた（能動態）

6. 使役態

使役態は、動詞に接辞 <⊕-(s)ase-> または <⊕-(s)as-> を付加することで表される。なお、後者の接辞 <⊕-(s)as-> について、山田（2011）p. 19 は「西濃地方では、関西地方が近いにもかかわらず、使役の助動詞として「ス・サス」に関する記述が見られない」とするが、少なくとも大垣方言においては、既に奥村編（1976）p. 228 に記述がある通り、後述するような制約はあるものの、普通に用いられている。ただし、奥村編（1976）p. 228 の記述に見られる、母音語幹動詞に付く使役接辞 <*-jas-> は、現在全く聞かれない。また、いわゆる「さ入れ言葉」もほとんど用いられない。

これまでに挙げてきたヴォイス接辞と同様、使役態接辞もアクセント素性の有無に揺れがある。接辞 <⊕-(s)ase-> に関しては、上述の可能態接辞 <⊕-(r)e-> <⊕-(e)re-> <⊕-(r)are-> と同様⁽¹⁴⁾に、ヴォイス接辞はアクセント素性を持たないという日本語の一般的傾向と、語幹が2音節以上の母音語幹動詞は+アクセント素性を持つという大垣方言の原則との矛盾から揺れが生じていると考えられる。<⊕-(s)as-> に関しては、前者の傾向と、/k/, /g/, /s/ で終わる動詞語幹が+アクセントに偏っているという大垣方言の傾向（吉安（2021）pp. 141-140）との矛盾から揺れが生じていると考えられる。

接辞 <-(s)as-> は子音 /s/ で終わる派生動詞語幹を作り出すが、これは /s/ で終わる通常の動詞語幹と異なり、音便形においていわゆるサ行イ音便を起こすことがない。例えば、語彙的動詞としての〈切らす⁽¹⁵⁾〉であれば〈醤油を切ら^いた〉のように言うことが可能であるのに対して、〈切る〉の使役態としての〈切らす〉の過去形は〈太郎にその紐を切ら^した〉のようになり、〈*太郎にその紐を切ら^いた〉とは言えない。なお、そのため、接辞 <-(s)as-> の過去形は常に <-(s)asita〉という音形になり、尊敬接辞 <-(s~j)aqse-> の過去形に当たる語尾 <-(s~j)asita〉と音形が衝突する⁽¹⁶⁾。例えば、〈言わした〉は、使役の「言わせた」と尊敬の「おっしゃった」の両方の意味を表しうる。

<⊕-(s)ase->

子音語幹	⊕kak-	+ -(s)ase-	+ -(r)u	→ kakaseru	/カカセ ¹ ル/	《書》
	⊕job-	+ -(s)ase-	+ -(r)u	→ jobaseru	/ヨバセ ¹ ル/~/ヨバセル ¹ /	《呼》
母音語幹	⊕mi-	+ -(s)ase-	+ -(r)u	→ misaseru	/ミサセ ¹ ル/	《見》
	⊕ne-	+ -(s)ase-	+ -(r)u	→ nesaseru	/ネサセ ¹ ル/~/ネサセル ¹ /	《寝》

不規則 ⊕ko- + -(s)ase- + -(r)u → kosaseru /コサセ¹ル/ 《来》
 ⊖s- + -(s)ase- + -(r)u → saseru /サセ¹ル/~/サセル⁻/ 《為》

〈(⊕)-(s)as-〉

子音語幹 ⊕kak- + -(s)as- + -(r)u → kakaseru /カカ¹ス/ 《書》
 ⊖job- + -(s)as- + -(r)u → jobaseru /ヨバ¹ス/~/ヨバス⁻/ 《呼》
 母音語幹 ⊕mi- + -(s)as- + -(r)u → misaseru /ミサ¹ス/ 《見》
 ⊖ne- + -(s)as- + -(r)u → nesaseru /ネサ¹ス/~/ネサス⁻/ 《寝》
 不規則 ⊕ko- + -(s)as- + -(r)u → kosaseru /コサ¹ス/ 《来》
 ⊖s- + -(s)as- + -(r)u → saseru /サ¹ス/~/サス⁻/ 《為》

両接辞に意味上の違いはないが、先行あるいは後続の要素によって現れ方に偏りのある場合がある。基本的には〈-(s)ase-〉が汎用的な形態であり、〈-(s)as-〉には制約が多い。具体的には、〈-(s)as-〉は、可能態接辞〈-(r)e-〉〈-(r)are-〉・仮定語尾〈-(r)eba〉・命令語尾〈-(j)|e/o|⁽¹⁷⁾〉・尊敬接辞〈-(j)anse-〉〈-(s~j)aqse-〉・尊敬語尾〈-(j)ansu〉〈-(j)anta〉〈-(s~j)asita⁽¹⁸⁾〉・推量語尾〈-(i)sor〉を後続させることができない。以下、子音語幹〈kak-〉を用いて例を示す。

- 可能態 a1. kak- + -(s)ase- + -(r)e- + -(r)u → kakasereru 〈書かせれる〉
 a2. kak- + -(s)as- + -(r)e- + -(r)u → *kakaseru 〈*書かせ⁽¹⁹⁾る〉
 b1. kak- + -(s)ase- + -(r)are- + -(r)u → kakaserareru 〈書かせられる〉
 b2. kak- + -(s)as- + -(r)are- + -(r)u → *kakasareru 〈*書か⁽²⁰⁾される〉
- 仮定 c1. kak- + -(s)ase- + -(r)eba → kakasereba 〈書かせれば〉
 c2. kak- + -(s)as- + -(r)eba → *kakaseba 〈*書かせば〉
- 命令 d1. kak- + -(s)ase- + -(j)|e/o| → kakasejo 〈書かせよ〉
 d2. kak- + -(s)as- + -(j)|e/o| → *kakase 〈*書かせ〉
- 尊敬 e1. kak- + -(s)ase- + -(j)anse- + -ja → kakasejanseja 〈書かせやんせや⁽²¹⁾〉
 e2. kak- + -(s)as- + -(j)anse- + -ja → *kakasanseja 〈*書かさんせや〉
 f1. kak- + -(s)ase- + -(s~j)aqse- + -(r)u → kakasejaqseru 〈書かせやつせる〉
 f2. kak- + -(s)as- + -(s~j)aqse- + -(r)u → *kakasaqseru 〈*書かさつせる〉

g1.	kak- + -(s)ase- + -(j)ansu	→ kakasejansu	〈書かせやんす〉
g2.	kak- + -(s) as - + -(j)ansu	→ *kakasansu	〈*書かさんす〉
h1.	kak- + -(s)ase- + -(j)anta	→ kakasejanta	〈書かせやんた〉
h2.	kak- + -(s) as - + -(j)anta	→ *kakasanta	〈*書かさんた〉
i1.	kak- + -(s)ase- + -(s~j)asita	→ kakasejasita~ [?] kakasesasita ⁽²²⁾	〈書かせやした~ [?] 書かせさした〉
i2.	kak- + -(s) as - + -(s~j)asita	→ *kakasasita	〈*書かさした〉
推 量 j1.	kak- + -(s)ase- + -(i)sor	→ kakasesor	〈書かせそう〉
j2.	kak- + -(s) as - + -(i)sor	→ *kakasisor	〈*書かしそう〉

母音語幹に付く場合には更に制約が多く、子音語幹に付く場合の各制約（上述）に加えて、受動態接辞 〈(r)are〉・否定語尾 〈(a)N〉 〈(a/|Ø~R|)hen〉 〈(a/|Ø~R|)sen〉⁽²³⁾ 並びにそれらの活用形に相当する語尾・目的語尾 〈(i)ni〉⁽²⁴⁾ も後続させることができない。以下、母音語幹 〈mi-〉を用いて例を示す。

受動態	k1.	mi- + -(s)ase- + -(r)are- + -(r)u	→ misaserareru	〈見させられる〉
	k2.	mi- + -(s) as - + -(r)are- + -(r)u	→ *misasareru	〈*見さされる〉
	cf.	kak- + -(s)ase- + -(r)are- + -(r)u	→ kakaserareru	〈書かせられる〉
		kak- + -(s) as - + -(r)are- + -(r)u	→ kakasareru	〈書かされる〉
否 定	l1.	mi- + -(s)ase- + -(a)N	→ misasen	〈見させん〉
	l2.	mi- + -(s) as - + -(a)N	→ *misasan	〈*見ささん〉
	m1.	mi- + -(s)ase- + -(a/ Ø~R)hen	→ misasehen ~ misaserhen	〈見させへん~見させえへん〉
	m2.	mi- + -(s) as - + -(a/ Ø~R)hen	→ *misasahen	〈*見ささへん〉
	n1.	mi- + -(s)ase- + -(a/ Ø~R)sen	→ misasesen~misaseresen	〈見させせん~見させえせん〉
	n2.	mi- + -(s) as - + -(a/ Ø~R)sen	→ *misasasen	〈*見ささせん〉
目 的	o1.	mi- + -(s)ase- + -(i)ni	→ misaseni	〈見させに〉
	o2.	mi- + -(s) as - + -(i)ni	→ *misasini	〈*見さしに〉

格関係の変化については、基本的に標準語と同様である。使役態では、使役者を表す項が1つ増え、それが新主語としてガ格で標示される。その上で、動詞が自動詞の場合には能動態におけるガ格（旧主語）がヲ格～ニ格（後者は特に許容を表す場合）で標示

され、他動詞の場合には能動態における {ガ格 (旧主語) / ヲ格} が {二格 / ヲ格} で標示される。

p. 太郎ガ 花子ヲ 帰らせる

cf. 花子ガ 帰る (能動態)

q. 太郎ガ 花子ニ 車ヲ 運転させる

cf. 花子ガ 車ヲ 運転する (能動態)

なお、大垣方言において使役態に類似した働きを有する場合のあるものとして、いわゆる「ラカス型動詞」が挙げられる。ラカス型動詞とは、原則として動詞の語根に接辞〈-(a)rakas-〉(/r/ で終わる語根には〈-akas-〉)⁽²⁵⁾を付加することで、「ある好ましくない事態が非意図的に引き起こされるが、その原因が動作主の不注意、失敗などにあり、責任が動作主にある」(山田 (2001) p. 1) ことを主として表すものである。例えば、当方言において〈太郎が紙を濡らかす (nurakas-(r)u)〉は、「濡らしてはいけない紙を、太郎がうっかり濡らしてしまう」といった意味であり、意図のか否かが明示されない表現である〈紙が濡れる〉〈太郎が紙を濡らす〉と区別される。このとき、〈紙ガ濡れる〉を基準として考えると、〈太郎ガ紙ヲ濡らかす〉は項が1つ増えていることになり、ラカス型動詞は構文上および意味上、使役態と同等の働きを有するかに見える。しかし、実際には、ラカス型動詞を作る接辞 (ここでは〈-akas-〉) は、動詞語幹〈nure-〉ではなく語根〈nur-〉に付加されているものであって、自動詞〈濡れる〉(語幹〈nure-〉)や他動詞〈濡らす〉(語幹〈nuras-〉)における〈-e-〉〈-as-〉と同じレベルに属する接辞として分析される。これらの接辞は、語根から動詞語幹を作り出すものであって、使役態接辞のように既成の動詞語幹を活用させる接辞とはレベルを異にしている。また、格関係は語根ではなく語幹のレベルにおいて初めて定まるものであるから、これらの接辞が語根から語幹を作り出す段階において、格関係の変化を認めることは原理的に不可能である。以上のことから、本稿ではラカス型動詞を作る接辞をヴォイス接辞としては扱わないものとする。

7. 存続態

存続態は、動詞に接辞〈⊕-tar-〉を付加することで表される、存続相というアスペクトを兼ねたヴォイスである。存続態接辞〈⊕-tar-〉は、〈-te ar-〉(「～てある」)の縮約によって生じたものであり、動詞〈⊕ar-〉(有る)に由来する+アクセント素性を持ち、また、動詞語尾〈-te〉と同様に音便を生じる。なお、意味上および統語上、非縮約形〈-te ar-〉も同じ働きを有するが、本稿では第2章に述べた通り、これをヴォイスの一種としては扱わない。

子音語幹	⊕kak- + -tar- + -(r)u → kaitaru	/カイト [↑] ル/	《書》
	⊖job- + -tar- + -(r)u → jondaru	/ヨンダ [↑] ル/	《呼》
母音語幹	⊕mi- + -tar- + -(r)u → mitaru	/ミタ [↑] ル/	《見》
	⊖ne- + -tar- + -(r)u → netaru	/ネタ [↑] ル/	《寝》
不規則	⊕ko- + -tar- + -(r)u → kitaru	/キタ [↑] ル/	《来》
	⊖si- + -tar- + -(r)u → sitaru	/シタ [↑] ル/	《為》

なお、カ行変格動詞の存続態〈来たる〉は単独では用いられないが、〈買って来たる〉（「買って来てある」）のように、補助動詞としては用いられる。

存続態接辞〈⊕-tar-〉と恩恵表現接辞〈⊖-tar-〉（〈-te jar-〉（「～てやる」）に由来するが、受益者の待遇は必ずしも低くない）は、アクセント素性のみによって区別される。よって、アクセント素性の違いがアクセントの違いとして実現する環境では /カイト[↑]ル/（書いてある）：/カイタル[↑]/（書いてやる）のように区別ができるが、そうでない環境では /カイタリナ[↑]ガラ/（書いてありながら／書いてやりながら）のように音形からは区別ができない。

格関係の変化については、能動態における {ガ格（旧主語）／ヲ格} のうち、前者が消えることで項が1つ減り、後者が新主語としてガ格で標示される。

- a. ^{せんたくもん}洗濯物^ガ 干したる
 cf. 太郎^ガ 洗濯物ヲ 干す（能動態）

8. 受益態

受益態は、動詞に接辞〈⊖-temaw-〉を付加することで表される。受益態接辞〈⊖-temaw-〉は〈-te moraw-〉（「～てもらう」）の縮約から生じた形態であり、動詞〈⊖moraw-〉（貰う）に由来する－アクセント素性を持ち、また、動詞語尾〈-te〉と同様に音便を生じる。なお、意味上および統語上は非縮約形の〈-te moraw-〉も同じ働きを有するが、存続態の場合と同様、本稿ではこれをヴォイスの一種としては扱わない。

子音語幹	⊕kak- + -temaw- + -(r)u → kaitemau	/カイテマウ [↑] /	《書》
	⊖job- + -temaw- + -(r)u → jondemau	/ヨンデマウ [↑] /	《呼》
母音語幹	⊕mi- + -temaw- + -(r)u → mitemau	/ミテマウ [↑] /	《見》
	⊖ne- + -temaw- + -(r)u → netemau	/ネテマウ [↑] /	《寝》
不規則	⊕ko- + -temaw- + -(r)u → kitemau	/キテマウ [↑] /	《来》
	⊖si- + -temaw- + -(r)u → sitemau	/シテマウ [↑] /	《為》

※ /w/の削除は形態音韻規則 w → Ø / _[i, u, e, o] による。

音形の類似した表現として〈-te maw-〉(「～てしまう」)があるが、こちらは2語からなっており、また、両者は音調上区別が可能である。例えば、+アクセント素性の動詞の場合には /カイテマウ/ ○●●●● (「書いてもらう」) : /カ[↑]イテ_{マウ}/ ●○○○○ (「書いてしまう」)、-アクセント素性の動詞の場合には /ヨンデマウ/ ○●●●● (「呼んでもらう」) : /ヨンデ_{マウ}/ ○●●●○⁽²⁶⁾ (「呼んでしまう」) のように音調が異なる(スペースは語境界、アンダーバーは低接を表す。また、各拍の音高を高(●)・低(○)の二段階で模式的に示したものを付した)。

受益態においては、受益者が新主語としてガ格で標示され、更に能動態における「ガ格/ヲ格」が「二格～カラ格/ヲ格」で標示される。このうち、動作主を表す格については、受動態と同じく方言差のあることが知られる(国立国語研究所編(1989)第26図参照)が、大垣方言では標準語と同じく二格が普通であり、カラ格は「何らかの移動の意味を含む場合」(日本語記述文法研究会編(2009) p. 128)に用いられる。また、受益者については、潜在的な能動態の文において表現されうる場合とされえない場合とがあり、後者の場合には項が1つ増えていることになる(下例 b 参照)。

- a. 花子^ガ 太郎^ニ 靴^ヲ 買ってまう
- cf. 花子^ニ 太郎^ガ 靴^ヲ 買う (能動態)
- b. 花子^ガ 太郎^ニ 掃除^ヲ 手伝ってまう
- cf. 太郎^ガ 掃除^ヲ 手伝う (能動態)

9. 希求態

希求態は、動詞に形容詞化接辞〈-(i)ta-〉を付加することで表される。そのため、上述の各ヴォイスとは異なり、希求態は活用上およびアクセント上、動詞ではなく形容詞として振る舞う。なお、大垣方言における形容詞のアクセント素性は全て+に合流しているため、語全体のアクセントは語尾のみによって決定される。そのため、語幹や接辞のアクセント素性は問題とならない。

子音語幹	⊕kak-	+ -(i)ta-	+ -i	→ kakitai	/カキタ [↑] イ/	《書》
	⊖job-	+ -(i)ta-	+ -i	→ jobitai	/ヨビタ [↑] イ/	《呼》
母音語幹	⊕mi-	+ -(i)ta-	+ -i	→ mitai	/ミタ [↑] イ/	《見》
	⊖ne-	+ -(i)ta-	+ -i	→ netai	/ネタ [↑] イ/	《寝》
不規則	⊕ki-	+ -(i)ta-	+ -i	→ kitai	/キタ [↑] イ/	《来》
	⊖si-	+ -(i)ta-	+ -i	→ sitai	/シタ [↑] イ/	《為》

希求態においては、標準語と同様に、能動態における {ガ格／ヲ格} が a. {ガ格／ガ格} または b. {ガ格／ヲ格} で標示される。ただし、他動詞の希求態が a の格関係を取る場合、基底においては2つのガ格が存在することになるが、実際には一方が主題化されたり省略されたりして、ガ格句が連続しない形で実現する方が普通である。なお、同じく希求を表す動詞接辞 <-(i)tagar-> ではこの格関係の変化が起こらない（例えば <*太郎ガ水ガ飲みたがるのは知っとる> は非文）ため、こちらは希求態接辞ではない。

- a. 太郎**ガ** 水**ガ** 飲みたいのは知っとる
- b. 太郎**ガ** 水**ヲ** 飲みたいのは知っとる
- cf. 太郎**ガ** 水**ヲ** 飲む（能動態）

10. 難易態

難易態は、動詞に形容詞化接辞 <-(i)niku-> <-(i)noku-> <-(i)zura-> もしくは <-(i)jasu-> を付加することで表される。希求態と同じく、難易態は活用上およびアクセント上、形容詞として振る舞う。アクセント素性の問題や格関係の変化についても、二重ガ格の問題を含め、希求態と同様である。以下に例を示す。

- a. 太郎**ガ** 小さい字**ガ** 読みのくいのは知っとる
- b. 太郎**ガ** 小さい字**ヲ** 読みのくいのは知っとる
- cf. 太郎**ガ** 小さい字**ヲ** 読む（能動態）

11. おわりに

本稿では、現代大垣方言におけるヴォイスについて、形態と格関係の変化に注目して記述を行った。

現代大垣方言に認められるヴォイスの各形態そのものは、ほとんどが近隣の大垣市赤坂方言（杉崎（2021））や愛知県木曽川方言（平子・久保蘭・山口（2019））においても報告されているものである。また、杉崎・植川（2003）および奥村編（1976）に記述されている昭和期以前の大垣方言と対照しても、その違いは僅かである。構文についても、現代標準語との間に大きな差異は認められない。しかしながら、濃尾地方の方言におけるヴォイスについて、形態のおよび構文的側面を網羅的に記述している研究は、管見の限りこれまで皆無であった。本稿は、当地域の方言におけるヴォイスについての基礎資料として、今後の通時的ならびに共時的な研究に資せんとするものである。

最後に、本研究は、現代大垣方言の総合的記述の一部をなすものである。今後とも、

大垣方言のあらゆる言語現象を記述すべく、調査研究を進めていきたい。

注

- (1) 能動態は、いかなるヴォイス接辞も付加されないことによって消極的に標示されるヴォイスである。また、この能動態における格関係は、他のヴォイスにおける格関係の変化を指摘する際の基準、すなわちデフォルトの格関係として措定されるものである。したがって、本稿におけるヴォイスの定義にかかわらず、能動態はヴォイスとして認めるものとする。
- (2) 接辞や語尾を表記する際は、子音同士もしくは母音同士が接してしまう場合に規則的に挿入される音を丸括弧 () 内に入れて示すこととする。例えば、〈mi-〉のように母音で終わる語幹に母音で始まる接辞〈-e〉が付く場合、両者の間には子音 /r/ が規則的に挿入されて〈mire-〉のような形態となるため、本稿ではこの接辞を〈-r(e)-〉と表記している。ただし、動詞においてテ形を作る語尾〈-te〉のように音便の生ずる場合があるものについては、特に挿入音を示さなかった。
- (3) 無活用動詞（屋名池（2011）p. 108 の用語で、学校文法における複合サ変動詞の語幹に相当）において、その活用を補助動詞〈する〉が代わりに担う場合を除く。
- (4) 大垣方言における接辞〈-tar-〉は、歴史的には「動詞テ形＋〈ある〉」の縮約に由来すると推定されるが、現在においては完全に接辞化しており、「動詞テ形＋〈ある〉」の二次的あるいは臨時的な縮約による形態ではない。その証左として、「動詞テ形＋〈ある〉」の否定形として「動詞テ形＋〈*あらん (*ar-(a)N)〉」（例：〈*停めてあらん〉）が言えないのに対し、接辞〈-tar-〉の否定形としては〈-tar-(a)N〉（例：〈停めたらん〉）が普通に用いられているという事実が挙げられる。もし現在でも両者が非縮約形・縮約形の関係にあるとすれば、「動詞テ形＋〈*あらん (*ar-(a)N)〉」が不自然である以上、その縮約形に相当する〈-tar-(a)N〉という形態も不自然でなければならないはずである。ところが、実際には後者はごく自然な言い方であるため、両者の共時的な縮約関係は否定されるのである。
- (5) ここでの「#」は語境界を表す。
- (6) 〈kak-i〉の〈-i〉は、後述する通り、中止形を作る語尾〈-i/Ø〉である。この語尾は、子音語幹の後ろでは /i/、母音語幹の後ろでは /Ø/ として現れる。
- (7) 並立助詞の〈と〉。ただし、格助詞〈と〉との曖昧性を有す。
- (8) 注2にも述べた通り、活用では原則として、子音同士が接すれば母音が、母音同士が接すれば子音が挿入される。したがって、もし仮に母音始まりの接辞〈*aw-〉が存在するとすれば、語幹との間に挿入される音は母音 /i/ ではなく、子音でなくてはならないはずである。また、子音終わりの語幹である〈kak-〉に付加されても、/i/ の挿入は起こらないはずである。以上のことから、接辞〈*(i)aw-〉を立てる解釈は成り立たない。
- (9) 品詞と活用型が必ずしも一対一に対応しないのは、例えば、有活用形容詞型・無活用形容詞型（学校文法における形容動詞型）・無変化型といった複数の活用型の語を含む助動詞においても同様である。また、動詞の活用形が形容詞型の活用をする典型例としては、標準語における動詞の否定形（接辞〈-(a)na-〉）を挙げることができよう。
- (10) 〈飲みたい〉が主節の述語として用いられる場合には〈太郎^ワ水^ガ飲みたい〉のように言うのが自然であり、主題を示す係助詞〈^ワ〉によって、動作主〈太郎〉がガ格に置かれていることが見かけ上確認できなくなってしまう。これを回避するため、この例では〈のは知つとる〉を後続させることで、〈飲みたい〉を従属節の述語としている。
- (11) 〈-i〉は形容詞の基本形を作る語尾。
- (12) 本稿において、アクセント素性を表す記号（ここでは「⊕」）に付された丸括弧 () は、その有無に揺れがあることを示す。
- (13) 紙幅の都合上、意味を表す漢字部分のみを示す。以下同様。

- (14) 可能接辞における揺れの原因については、吉安（2023）p. 165 の注5において同様の考察を述べた。
- (15) ただし、サ行イ音便自体が衰退傾向にあるため、高年層を除き、このような語形が実際に発話されることは稀である。
- (16) ただし、この語尾が母音語幹に付き、挿入子音として /j/ 選ばれた場合に限っては衝突が生じない。なお、挿入子音として /s/、/j/ のいずれを用いるかは任意である。注18も参照されたい。
- (17) 子音語幹には /e/、母音語幹には /o/ が選択される。
- (18) 尊敬語尾 <-(j)ansu> は直前に挙げた尊敬接辞 <-(j)anse> の基本形に、<-(j)anta> は過去形に相当する。また、先にも述べた通り、尊敬語尾 <-(s~j)asita> は尊敬接辞 <-(s~j)aqse> の過去形に相当する。いずれも第三者を待遇する形式であるが、若年層での使用頻度は低い。
- (19) 接辞 <-(s)ase> による使役態 kak- + -(s)ase- + -(r)u → kakaseru 〈書かせる〉として解釈されてしまい、使役態+可能態としては解釈されない。
- (20) 子音語幹動詞の場合は、<-(r)are> が可能態ではなく受動態の接辞として解釈されてしまい、使役態+受動態として解釈される。例 b1 の〈書かせられる〉において接辞 <-(r)are> が可能態とも受動態とも解釈されうるのは対照的である。また、母音語幹動詞の場合は、mi- + -(s)as- + -(r)are- + -(r)u → *misaseru 〈*見さされる〉のような、実在しない語形となる。
- (21) 尊敬接辞 <-(j)anse> には基本形語尾 <-(r)u> が付かない（注18参照）ため、代わりに仮定語尾 <-ja> を付けた例を示した。したがって、〈書かせやんせや〉は「お書かせになれば」の意。
- (22) 挿入子音の選択は本来任意だが、この場合は /j/ が好まれる。/s/ を選択すると、サ行音が連続してしまうためであろう。
- (23) 否定語尾 <-(a/|Ø~r)hen> <-(a/|Ø~r)sen> は、子音語幹に付く場合には /a/ が挿入音となり、母音語幹に付く場合には、語幹が1拍であれば必ず長音 /R/ が挿入され、2拍以上であれば任意に長音 /R/ が挿入される。例えば、子音語幹 <kak-> に付けば <kakahen> 〈kakasen>、1拍の母音語幹 <mi-> に付けば <mirhen> 〈mirsen>、2拍の母音語幹 <tabe-> に付けば <tabehen> 〈taberhen> 〈tabesen> 〈tabersen> となる。ただし、中年層以下では、否定を強調する場合を除いて <-(a/|Ø~r)sen> はあまり使用されない。
- (24) 過去形に相当する <-(a)nanda> <-(a/|Ø~r)henanda> <-(a/|Ø~r)senanda> 等。具体的には、吉安（2021）pp. 134-133 の注3に列挙した語尾のうち、<-nanda> から <-sento> ままで該当。
- (25) 詳しくは別稿に譲るが、語彙的例外も多い。また、全ての語根がそれに対応する自動詞と他動詞を完備していないのと同様、本接辞も全ての語根に付けられるわけではない。
- (26) 和田（1969）の用語で、「前部が平板型のときわざわざ低くさがって付き、前部が起伏型ならそのまま低く付く」（p. 149）音調を指す。吉安（2022）に述べた通り、大垣方言において低接は、助詞および助動詞が名詞・無活用用言（学校文法における複合サ変動詞ならびに形容動詞の語幹に相当）・動詞打消形以外の語に付く場合に現れる音調である。したがって、動詞に補助動詞（ここでは〈まう〉）が付く場合の音調を「低接」として説明することには、議論の余地がある。この補助動詞〈まう〉が示す特異な音調は、吉安（2021）p. 137 でも論じたように解釈が難しく、今後更なる検討を要す。
- (27) 金田一語類の用語に依るならば、第1類が第2類に合流している。

参考文献

- 奥村三雄編（1976）『改訂増補岐阜県方言の研究』（1988年の再版による）大衆書房
 国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図 第1集』大蔵省印刷局

- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊 pp. 1-262
- 杉崎好洋 (2021) 『岐阜県大垣市赤坂方言の記述的研究』三恵社
- 杉崎好洋・植川千代 (2003) 『美濃大垣方言辞典』第2版 美濃民俗文化の会
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法2』くろしお出版
- 平子達也・久保蘭愛・山口響史 (2019) 「木曽川方言文法概説」青井隼人・木部暢子編『国立国語研究所共同研究 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 方言の記録と継承による地域文化の再構築 愛知県木曽川方言調査報告書』国立国語研究所 pp. 7-70
- 屋名池誠 (2005a) 「活用の捉え方」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店 pp. 71-77
- 屋名池誠 (2005b) 「活用とアクセント」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店 pp. 78-80
- 屋名池誠 (2011) 「文法論と語彙」斎藤倫明・石井正彦編『これからの語彙論』ひつじ書房 pp. 97-112
- 山田達也 (2001) 「名古屋方言における「らかす」派生動詞の形態的分析」『名古屋・方言研究会会報』第18号 pp. 1-9
- 山田敏弘 (2005) 『ぎふ・ことばの研究ノート 第4集 岐阜大学生のことばの統計的分析①～品詞・活用、格、ヴォイス、アスペクト・テンス、否定の特徴～』私家版
- 山田敏弘 (2011) 『ぎふ・ことばの研究ノート 第10集 西濃方言に見られる文法項目』私家版
- 吉安良太 (2021) 「大垣方言における用言の形態音韻論的分析——音便形と補助用言のアクセントを中心に——」『藝文研究』(慶應義塾大学) 第120号 pp. 147-131
- 吉安良太 (2022) 「大垣方言における助詞・助動詞のアクセント——形態論の観点に基づく記述——」『藝文研究』(慶應義塾大学) 第123号第1分冊 pp. 142-125
- 吉安良太 (2023) 「岐阜県大垣方言における可能表現」『三田國文』(慶應義塾大学) 第68号 pp. 182-162
- 和田實 (1969) 「辞のアクセント」『国語研究』(國學院大学) 第29号 pp. 1-20 (徳川宗賢編 (1980) 『論集日本語研究2 アクセント』有精堂 pp. 145-159に再録のものによる)

※本研究は、JSPS 科研費 JP23KJ1887の助成を受けたものである。

(よしやす・りょうた)